
拳法無宿 ~ D e a d H i t ~

晶輪寺零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拳法無宿 〈Dead Hit〉

【Nコード】

N5965H

【作者名】

晶輪寺零

【あらすじ】

デッドヒット——素手でさえあればどこをどのように攻撃しよう
と自由、一切禁じ手の無い仕合いを人々はこのように呼んだ。元々
は試合形式の事を指した用語ではない。試合の最中に死亡事故が発
生した場合、その原因になったと思われる攻撃を指してこのように
呼んだ、仲間内の隠語である。チェレミーの前ではいいところ無し
のタツローですが、彼のもう一つの顔も見てやって下さい。只の昼行
燈ではない、タツローのもう一つの顔を。短編によるオムニバス形
式ですので、話の順序や進行はてんでバラバラです、予め御了承下

45°

スタジアムに漲る分厚く汗臭い熱気は、強大な暴風雨を生み出す濃厚な低気圧を思わせる、圧倒的なヴォルテージをはらんでいた。

リング上では、鍛え抜かれた格闘士がその肉体を激しくぶつけ合い、汗を飛び散らせながらその腕と力を披露していた。

リングを取り囲んだ客席からほとばしる野卑な息遣いは、暴力的なまでのエクスタシーを迎えて猛り狂っている。

「行けー！」

「やれー、ぶつ殺せー！」

金の賭かった試合に寄せられる、と言うよりぶつけられる粗暴な声援は、些かのつつましさも感じられない、人間の剥き出しの暴力性そのものと言えるような響きに満ちた怒声であった。客席に陣取るのは、何れも欲に駆られて身を粉にして働き、懐に硬貨をねじ込んだ労働者、或いは気の荒い相場師や流れ者の商人といった連中、この精力的な都会に集まった、刹那的な生き方を標榜する人間たちであった。或いは、昨今蔓延しつつある消費経済の権化ともいえる、経済振興策の優等生の如き者たちである。

王制国家ライマードの外れに位置する商業都市イグベノンには、こう言った明日をも知れぬ生き方に身をさらす者たちが溢れ返っている。まさしく宵越しの金を持たない、その場限りの生き様を地で行く男たち、いや、女も含めた全ての者たちであった。

ここ、フェロウバイ王立スタジアムでは、週に一度の格闘技興行が催されていた。

第一試合から始まった本日のプログラムは滞りなく進み、いよいよ最後のメインイベントを残すのみとなった。

リングに上がった両選手。

第一試合から、順序立てるようにヴォルテージを上げてきた客席の声援は、ここにきてピークを迎えたようである。

両選手のセコンドは既にリング下に降りていた。残された二人の選手は、レフェリーのボディチェックに身を任せ、後は試合開始を待つばかりであった。

殆ど罵声、あるいは怒号に近いこの大声援の真つただ中に立つ両選手が、リングの両端に分かれてコーナーに控えていた。

渦巻くように凄まじい観客の声援を切り裂く、不思議に透明感に満ちた、澄んだ金属音が鳴り響いた。

両選手ともにゴングが鳴らされてもすぐには突っかけず、何かを確かめる様な佇まいで距離を取っていた。

リング上で対峙した二人の男――いずれも鍛え上げられた肉体の、職業的格闘士である事が一目で見取れた。

一人は、背が高く、痩せ形で手足の長い、見るからにパンチやキックを得意とするような、ボクサー型のプロポーションである。躍動的な筋肉は見るからに強靱なバネを感じさせる打撃技のプロ、という趣だった。

観客にアピールするにはうつつつけの、かなり派手目な顔には無意味なまでに大げさな鬪気と不必要に強烈な眼力が宿っている。こういった商売には珍しくない顔である。ガラの悪い盛り場などでもよく目にする顔と言えた。

その周りには、客寄せの為に磨かれた下卑た輝きが漂っている。

彼の名はピート・ロギンス。

今一人は、さほどに上背は無い。一般人に交じれば高い部類と言うくらいのもので、こういった格闘選手としては決して大型ではない、寧ろかなり小柄な部類に入る身の丈である。体の厚みは申し分無く、肉厚でバランスのとれた体操選手型の体形である。特に、首の太さは顔の輪郭をも左右から押し包むが如き量感を備えている。上半身だけが発達したようなこけおどしの筋肉美ではなく、上から下までドツシリと張りの有る、柔軟かつ頑丈な戦闘用の肉体であった。

顔付は――それほど大ぶりではない。目鼻立ちは整って、顎の線が鋭角的な為、面長に見えぬことも無いが輪郭自体はほぼ標準並みである。

鋭い面立ちであった。

だが、それは強面とか、きつい顔とか言う意味ではない。どちらかと言えば穏やかな、人の良さそうなほどの面相であるが、同時に懐の深い、只ならぬ凄みを漂わせる、油断ならぬ顔でもある。

喩えて言えば、研ぎ澄まされた鋭利な刃物が見たところ刺々しいと言うよりも、全体のフォルムで言えばむしる曲線的であるような、そついう趣であろうか。のこぎりの様にギザギザした刃物は、触れたくらいでは手を切る事は無い。鋭い刃は大袈裟に尖つたりはせず、流れるように滑らかな稜線を描いて静かに輝くものだ。それも、その刃は容易く折れてしまう薄っぺらな剃刀などではない。分厚く頑丈な、骨まで両断する剛刀、胴田貫の如き業物である。

彼の周りに漂うオーラは上辺を塗りたくった様にきらびやかな、テラテラした安っぽい輝きではない。鍛え抜いた銘刀の地肌からジワリと滲みだす、玉鋼の輝きにも似ていた。

タツロー・コガ。

それが、この男の名前だった。

試合は既に始まっている。

リングを取り囲む客席からは、野蛮な声援が飛び交っている。スタジアム一杯に詰め掛けた観客が途方も無いポリウームの、殆ど罵声が怒号に近い声援を送っている。

レフェリーが二人の選手から、適当な距離を置きながら、慣れた調子で試合を裁いていた。

両選手ともに、相変わらず距離を置いたまま相手を窺うように立っている。

リングを取り囲むように陣取った客席からは、不思議なざわめきが沸き上がっていた。意味の有る言葉では無し、かといって叫び声や怒号とも違う、何か中途半端な無数の唸りが堆積して分厚い響きの層をなし、リングを取り囲んでいるようである。

二人はまだ間合いを詰めない。

時間にすれば、十数えるかどうかと言うくらいの間隔だったが、その僅かな間が、観客にはいやに長く感じられた。

ロギンスが仕掛けた。

大股で強引に踏み込んで距離を詰めるや、長いリーチを利用して、遠間から風を巻くようなパンチで撃ちかかって来た。

しかし、タツローは難なくこれを避ける。

打つ瞬間、相手がまだ動いていない、手を出そうと言うその時には既にタツローはブルツと体を一震いさせ、漸く攻撃が作動した時には一步踏み出していた。ロギンスがパンチを出した時には既にタツローは動いている。彼が撃ちかかった場所は、タツローの立っていた位置とは見当違いな空間であった。

続いて右の回し蹴り。中段を狙ってきた。これも、同じようにタツローはかわして、それだけではなく今度はあっさりとロギンスの懐に入ってしまった。

ロギンスは慌てて後退する。

いや、退こうとしたが、間に合わず懐に入られてタツローのボディブローを一発食ってしまった。

苦痛は感じない。

戦闘の興奮状態でアドレナリンが分泌されているため、痛覚は麻痺している。しかし、それが曲者である。この軽いボディブローが、痛みを感じぬからと言ってあまり何発も受け続けると後々効いてくる、内臓を圧迫する打撃である話をロギンスも聞いている。

人はタツローのこのボディブローを「ボイズツスト毒拳」と呼ぶ。

何故、タツローの中段突きがこのような効果をもたらすのか。

人体は水——この言葉に、その謎解きが隠されていた。

詳しく説明すると長くなるのだが、要するに人体は大半が液体で構成されており、表面を強く叩くより、深く押し潰すような打撃を受けると内臓自体が圧迫され、耐久性が劣化するのである。

タツローの拳打は、的に接触する瞬間に最大の速度を集中するよう訓練されており、その為標的に命中した後もある程度加速するのである。フォロースルーなどと言うような雑で曖昧な行為ではなく、

ハッキリと敵体に接触した時に速度を上げ、できるだけ深々と効力が浸透するように普段から心がけて練習しているのだ。

人体は水、とは良く目にする言葉であると思う。しかし、その意味——少なくとも、伝えんと言う意図を正確に実感しておられる方は少ないであろう。ハッキリ言えば、このフレーズにまつわる解釈は実に多種多様で、実態を把握するよりも、言ってしまう意味も分らず何やら神秘的なムードに酔う言霊の様な捉え方が一般的であると思われる。更に、多少真面目に考えようとする方々の間においても、その人その人によって解釈がまるで違うのである。医療用語として用いられる場合もあれば、哲学の様に語られる時もあるが、今回は武術としての解釈を、一応納得していただきたい。人体は水。

生物の体は、固体ではない。これは動物も植物も同じである。程度の差こそあれ、必ずその内部に水分が含まれている。特に人体の場合、質量の7割以上が液体だとの事である。その人体を破壊するためには、固体を粉碎するような打ち方よりも、液体、具体的には流体を押し潰すようなやり方が必要なのだ。

人間の体は、人によって鍛え方に個人差があると言っても、基本的には皆同じ、弾力を備えた液胞性のクッションなのである。

レンガや石を割るには、硬い鉄の棒かハンマーを用いれば簡単に割れる。何故か。これらは人体に比べればほぼ完全に固体であり、ほとんど弾力が無いからである。しかし、これが水気を含んだ生木になると、これらの硬質な道具で打っても容易く割れる事は無い。粘りが有るからである。逆に、のこぎりを使えば木は切れるが、石やレンガならば刃がかけるだけである。また、人間の頭を叩く時も、木よりは石やレンガの方が殺傷力がある。頭蓋骨は人体でも最も大きな骨格であり、かなりの硬度が有るからである。これが、腹を打った場合だと余り差はないであろう。このように、全ては相性があ

り、同じ人体ですらも場所によって性質や耐久性に違いがあるのだ。話がえらくそれてしまったが――要するに、人体と言う弾力のある物質を潰す為には、石やレンガを割るやり方ではなく、水に波紋を起こすやり方が必要とされるのである。

タツローの中段突きは、表面を叩くのではなく、標的に接してから更に加速して、瞬間的に押し潰すのである。できるだけ、拳がぶつからないような打ち方である。フォロースルーなどと言う中途半端なものではなく、明確に当たってから突きの速度を最大に加速するのだ。それにより、液体を含んだ内臓が瞬間的に圧迫され、その細胞をつないでいる組織の構造が劣化するのだ。

如何にも何か訓練したような形のロギンスの動きに対し、タツローの身捌きは日常の動作の様に自然であった。

パンチの速度も話にならないほどロギンスの方が速い。にも拘らず、ロギンスの攻撃はことごとく空を切り、タツローの、まるで素人の様なパンチが簡単に命中する。

タツローには、ロギンスの拳は見えない。
しかし、動きは見える。

ロギンスのパンチやキックは、末端の手や足が見えなくなるほど速い。しかし、動作が大袈裟で無駄が多過ぎる。
いつ攻撃してくるかも丸わかりだ。
動きはことごとく見えるのである。

いくら拳が消えるほどの高速でパンチを撃つても、目標からはるか離れた場所で思い切り振りかぶって打ち掛かったのでは無意味ではない。何よりも、打ち気が露骨すぎる。

今から殴りかかりますよ、と言っているようなものである。

人間の運動は、どんなに末端の動きであっても、必ず中心線から出るものである。パンチであれ、キックであれ、中心の動きを読んでいれば予測する事は容易い。

いつ来るか、どこに来るかが分かれば避ける事など造作も無い。
攻撃の瞬間、射線をずらせばそれだけで充分なのである。

尤も、試合において多数の禁止事項が設定されていれば、状況は変わってくる。例えば顔を殴ってはいけないとか、組み付くのは反則とか、背後からの攻撃は禁止と言ったルールでも定められていれば、仮に相手の攻撃を避けても、すぐさま次の反撃に出られない。そうなれば、避けられた方も別に慌てる必要はないのだ。一々ボックスだとかファイティングポーズだとか言われたのでは、この種の武術的な見切りは意味を為さなくなってしまう。

相手が何を仕掛けてくるか、その範囲が限られていればその部分にだけ意識を集中させ、敵の攻撃に備えれば済むだけの事である。そうしなければ力対力、反射神経の争いになるばかりであって、知性を駆

使した“術”の出る幕は無くなってしまふ。

武術とは、そもそも“術”とは、正々堂々の競争に勝つためのものではない。競争を避けて敵の隙を窺い、一方的に相手を打ち破るためのものなのだ。

武術とは、或る意味で言えば、卑劣な行為と言えるのである。

ロギンスには、タツローの拳が見える。

しかし、動きが見えない。

別に動体視力で追えないとかそういう意味ではない。普通に、動いている姿が見える。しかし、それがどういう風に来るのかが分らないのだ。全く闘争とはほど遠い、日常の動作のように見える。

そして、タツローの繰り出す拳もはつきりと見えるのだ。しかし、それを避けられない。闘志を剥き出しにして撃ちかかるのではなく、飽くまで何気なく動くタツローの攻撃を、避ける事が出来ない。

そして、タツローは殆んど動く事無く軽く身を裁くだけでロギンスの攻撃を簡単に避ける。

それが、ロギンスにとっては耐え難い屈辱である。

何故なら、タツローは強敵が相手ならば大きく動いて戦うのだが、ほとんど動かないのは対戦相手の実力が大した事が無い時である。

ロギンスも、その事を知っている。

タツローと言えど、実力者と対戦する時には格好などつけてはいられない。なりふり構わず、飛んだり跳ねたり、身を伏せたり跳び上がったたり転がったりしながら戦わざるを得ないのだが、実力差があるかに隔たっている相手にはできるだけ動かないのだ。

観客も、その事を知っている。

金を払って試合を観に来た客などと言う物は無責任で残酷なものだ。タツローに格下とはつきりみなされた試合ぶりを許したロギンスに

対して、容赦ない嘲笑と罵声が浴びせられている。

只でさえ、格上の相手に挑戦する立場で気負ったロギンスはこの呵責ない嘲笑で更に逆上してしまった。

怒りに我を忘れたかのようにパンチ、キックの乱打を浴びせようとするが、いずれも簡単に避けられる。無論、タツローは殆んど動かない。

何故に、斯様な避け方が可能なのかと言えば、一つは人間の動きを起動する、一種の神経電流の様な働きに関係が有る。これならば、常識の範囲でも納得できるであろう。現代科学の理論からは大きく外れてはいないからである。

しかし、今一つの要素は常識人には理解しがたい事と思う。何故ならば、全く科学的な常識からかけ離れた現象が起こっているからである。

古武術において、見切りと言われる行為、敵の攻撃から身を避ける為重要な方法は、空間自体をゆがめて距離感を支配する事なのである。

恐らく、信じがたい事と思う。只の、小説の為の創作、作者の空想の類と思われるかもしれない。

実は、現実的空間を歪める事は可能なのである。このような術技を武術の用語では、引進とか、縮地法などと言われる。

ロギンスが、左脚でタツローの右脚を狙った。このローキックに対し、タツローは全くこれを意に介さずといった趣で前に出ると、相手の両脇に手を差し込んで後、素早く体を差し替えてすくい投げに行った。

蹴りの直後でややバランスを崩したロギンスは、簡単に放り投げられた。

客席から、またも嘲りと面白半分の野次が飛ぶ。

何とか受け身を取ってタツローの方を窺うロギンスだが、相手はそこから仕掛けようとはしない。

無表情、と言うよりは何やら困ったような、相手にどんな顔を見せれば良いのか分らぬ様な感じで表情を消したタツローの、不器用で人の良いポーカーフェイスに、ロギンスの屈辱は更にエスカレートした。

対戦相手に同情されるようでは、この商売はやっていられないのである。

ロギンスは強引に、自分から間合いを詰めて接近した。何が何でもこの男に一撃を浴びせたいと言う欲求に引きずられ、彼は勝機も見えないのに無理な賭けに出してしまったのである。否、賭けと言うほどの、可能性のある選択ではない。全くめども立たず、きっかけも見えないのに、逆上して無理やり無茶な攻めに出ただけである。

しかし、ロギンスの方にもそれなりの理由はあった。先にタツローから受けた例のボディブロー、あの打撃は後々効いてきて、確実にスタミナを奪われると言う話を彼も知っていた。このまま長期戦になれば、自分は不利になる。その情報が却ってアダとなり、ロギンスに強引な攻撃を仕掛けさせたのである。

だが、それは単に追い詰められた焦りの為、無謀な攻撃を仕掛けたに過ぎない。

タツローにすれば思う壺、とすら言いようのない、何やら相手には失礼ながらまたしても同情するしかないほどに軽率なロギンスの行動である。

接近してくるロギンスに合わせるように、タツローは一步、やや跳ねるような足取りで後退した。そこでロギンスは踏みとどまるべき

であった。だが、頭に血が上ったロギンスは前後の見境なく後退するタツローを追いかけた。

深追いしてきたロギンスの動きに合わせて、今度はタツローが前に踏み出した。その足取りは自然で、動作は吸い込まれるに見えた。あつ、とロギンスが気付いた時にはもう手遅れであった。

身長が低く、リーチも短いタツローに懐に入られ、腹に一発、またしても右の拳を食らった。その動きは、何と言う事の無い、抱え込むような動作だったが、それだけで充分だった。

「ぐ……」

今までにも、試合中に同じような拳打を浴びせられたが、この一撃は違うようだ。

先に受けた時のブローは、何か打ち捨てる様な、軽い打撃だった。当たっても内臓全体が押しつぶされる様な打撃で、いわば衝撃が全体に分散するような感じである。しかし、たった今タツローがロギンスに放った一打は、もつと鋭く、その衝撃は集約的で突き刺さるような感覚であった。それまでのブローがパンチならば、今の拳動はまさしく突きである。

筋肉の働きで言えば、それまでの打撃動作は伸筋主体だったのに対し、今の一撃は屈筋主体の動作である。踏み込みも、ぐっと力強く、深く重心を沈めていた。

タツローは、突きを放ったその姿勢のまま残心の構えで佇んでいた。ロギンスもまた、拳を受けた姿勢そのままに立ち尽くしていた。

それまで収拾がつかないほどの騒乱に満ちていた観客が、一気に静まり返った。

どちらも動かない。

客席は静まり返ったままである。

タツローは、凍てついた時間が溶け出すような拳止でロギンスの腹

から拳を引き抜くと、徐に後退を始めた。

目を剥いたままのロギンスを、油断なく窺いながらタツローは、一歩一歩、踏み応えを確かめる様な足取りで後退った。

観客は、恰もその一挙手一投足をも見逃すまいとするように、息をつめた様にタツローを凝視していた。

後退しながらもタツローは、静かな、真剣な、恰も用心深く何かを観察するような表情のまま、ロギンスを見詰めていた。

そんな光景が繰り広げられるリングを取り囲む客席は、つい先ほどまでの喧騒がうそのように静まり、威圧的なまでの沈黙がスタジオム全体を支配していた。

既に、観客の脳裏にはこの先に展開するであろう風景が、目に見えるが如くありありと浮かんでいた。その瞬間が訪れるのを、客席の誰もが今や遅しとばかりに息を殺して待ち構えていた。

無言の圧迫感が支配する客席からは、しわぶき一つ起こる事無く、押し詰まったような束の間の静寂が、スタジオムに幻の様な違和感に彩られた空間を演出していた。

タツローが、クルリと後ろを振り返った。

腹を押さえながらロギンスがその場に膝をついた。

まるでそれを待っていたかのようにゴングが慌ただしく打ち鳴らされ、観客も抑え込んでいたエネルギーを開放するように無秩序で壮

絶な歓声を放った。

タツローの背後には、腹を押さえたまま葛折れたロギンスが蹲っている。

このスタジアムでは毎週のように繰り返される、御馴染の光景であった。

本編予告 1

「あんた、一体誰よ」

娘が一番に仲裁者——タツローに言った。娘だけではない。誰もが何の脈絡もなく現れた奇妙な男に対し、怪訝の面持ちを向けていた。

そう、何とも奇妙な男である。人目で武道家か何かと思われる鋭い、精悍な顔立ちの男。洗いざらして色落ちしたマントを羽織ったみすばらしい姿とは何とも不釣り合いな事に、メイド姿の少女を連れている。それだけなら多少の違和感はあるも別にどうと言うこともないだろう。問題は二人のつながりであった。そう、つながり。二人の間をつなぐ物。一目でそれは分かる。少女が握り締めた丈夫そうな革紐、どうやら手首にリストバンドでしっかりと固定しているらしい。その紐のもう片方がつなげた先は——愕くべき事に——男の腰の辺りだった。メイド姿の少女を革紐でつないだ男。否、寧ろどう見てもその逆だった。メイド姿の少女に腰紐を握られた、武者風の男。変質者であった。これぞまさしく変質者であった。これを変質者と呼ばずして何をもって変質者と呼べば良いのだろうか。ケレン味のない、堂々たる風格の、正真正銘の変質者だった。一分の隙も見当たらない、完全無欠の変質者であった。どこにも非の打ち所のない、模範的な変質者と言っても良からう。

本編予告 1 (後書き)

本編の予告、こちらに移しました。

キャラクター紹介

タツロー・コガ

(身長171cm 24歳)

ファイターとしてのタイプ

基本的にはなまくら四つ、なんでもこなせるオールラウンドプレイヤー。その体型は全体的に分厚く、筋肉の質も締まってはいるがガチガチではなくバネの有る肉体。ボディビルダーのように上半身だけが発達した逆三角形の体型にあらず、腰から脚までガッチリと太い。運動神経も良く、立体的な空中殺法から接近戦における短打、時には投げ技から寝技、関節技まで、過不足無く身に付けている。伝統的な武術に加えて実戦で身につけた裏技、時に卑劣な隠し技にいざとなったら殺し技まで何でも来いの本格派である。相手によって戦法を変える事も出来、自分より大きな相手には主にリーチの差を埋める為の飛び道具が主体、小兵には接近戦で応じる事が多いが、それも状況次第でいくらでも変更が効く。これも相手次第だが、大体雑魚を相手にした時は余り動かず、手ごわい対戦相手には動きが大きくなることが多い。得意技は旋風脚、掃腿、端脚、弓歩捶、延髄斬り、ローリングソバット、ドロップキック、ジャンピングボデイアタック、逆エビ固めなど。

リベルナ・ルクサリス

(身長162cm 19歳)

極宝真券を身に付けた女武闘家で、チャキチャキした攻撃的な性格はまさしく“武闘派”そのものと言える。その反面男にやたらと惚れっぽい妙な性癖があり、しかも始末に負えないのは本人にその自覚がないという事。一度病気が始まったら口調までが改まり、普段の男っぽい言葉づかいは打って変わってしおらしい態度に一変する。そして極めつけは、

「何言つてんだい、そんなんじゃないよ。誤解するなよ」

これが出たら最後、ふられるまで暴走し、仲間を巻き込んでやけ酒と言う迷惑なパターンが確立されている。年に一度イグベノンで開かれるバーストスピリット格闘大会に参加する為ライマードにやってきた折、街中で与太者に絡まれて奮闘する最中、タツローとチェレミーに出会う。

ジヨー・ヨツシー

(身長174cm 22歳)

商業都市イグベノンの格闘士。バーストスピリット大会2回戦でタツローと拳を交えるも実力差を嫌と言うほど見せつけられて見事に敗退。以来彼を「アニキ」と呼び、何かと世話を焼く。中々男氣の有る性格で、のほほんとしたタツローとは正反対の熱血漢。だが、同時に計算高いしたたか者でもあり、この年で既に自分のジムを創業し、チャンピオンとなったタツローをちゃっかり宣伝に利用している。そのファイターとしての素質は中々の物が有るが、我流の限界とこれ一筋に打ち込めないムラツ氣のせいで今一步壁を突き破れ

ない所もあるようだ。

ダリー・ヨッシー

(身長164cm23歳)

ジヨー・ヨッシーの女房。リベルナ達からは「おかみさん」などと呼ばれて慕われるしっかり者で、結婚前はバーストスピリット大会女子の部で優勝したこともあり、荒っぽい下町のジムをその気風で切り盛りする女傑。亭主との喧嘩はほとんど日課で、ストリートジムの風物詩でもある。

ハゴン・オールダ

(身長169cm24歳)

タツローとは道場時代の仲間で、今ではジヨーのジムでちゃっかりコーチ兼マネージャー兼顔役に居座る要領の良い男。ジヨーは彼を「ダンナ」と呼び、ハゴンは「大将」と呼んで何やら漫才まがいの名コンビとして意気投合しているようだ。オタク気質のタツローと対照的な遊び人で、後家や人妻に手を出してはトラブルを起こす厄介者。

オルフィア・クレビー

(身長159cm20歳)

バーストスピリット大会の最中タツロー達と巡り合い、以来仲間の
ような間柄になった。男あしらいはうまく、高飛車な所があるかと
思えば巧みに媚びを取り混ぜながら座をリードしていく、どちらか
と言えば水商売系の性格。気風の良いいリベルナともなぜかウマが合
い、今では大の親友である。その男遍歴も奔放で、タツローとも一
度くらいはと狙いを付ける油断のならぬ女である。

ボロス・アスマッド

(身長170cm52歳)

商業都市イグベノンの大親分的な地位の豪商で、フェロウビイ競技
場の定期興行を取り仕切るプロモーターでもある。腕一本で貧民屈
からのし上がった苦勞人で相当なやり手だが、それだけに油断のな
らぬ人物でもある。彼のモットーは「人の命は尊い。しかし、世の
中にはその尊い命よりもっと大事な物がある。それが金だ！」

クレウス・レクラ・ド・ヴィルザム

(身長174cm26歳)

イグベノンを裁量する三領主の一つであるヴィルザム家の現当主。
奇抜な才気と奔放な行動力で常に騒ぎを起こす迷惑な人物。彼に関
する逸話も色々あるが、卒論でライマード領内に紙幣を発行しよう
と国王に上申し、大臣以下宮廷をパニックに陥れた話は王立学習院
でも伝説になっている。他にも色々騒動に事欠かない天才的なトラ
ブルメーカー。格闘技にも目が無い男で何故かタツローの事を気に

入ってしまった。

ニツク・タイガー

(身長173cm23歳)

剛弾錬筋術という、武術と言うより一種の鍛錬法でその肉体を鍛え上げたつわもので、その外見はまさしく筋肉の塊。バーストスピリット大会今年度4位の実力者。残念ながらトーナメント本戦でタツローとの手合せは実現しなかったが、定期興行での試合はパワーとテクニツクが正面から激突する激しい空中戦となり、多いに観客を沸かせた。豪放磊落な性格で、ジョーと妙にウマが合う、というよりじゃれ合いのように喧嘩を繰り返している。タツローの事を「チャンピオン」と呼ぶ。

ギモス・エレンディ

(身長172cm27歳)

禽拿術という、拳法に対する捕獲術のような武術の使い手。本年度バーストスピリット大会では第一回戦でタツローと顔を合わせ、残念ながら初戦敗退という不本意な結果に終わったが、相当な実力者でもある。チャンピオンのタツロー・コガによると、トーナメント本戦で手合せした中で最も手ごわいと感じたのがこのエレンディとの事である。

スーリー・ブルタムス

(214cm28歳)

リベルナと同じ極宝真拳の使い手。その痩せこけた巨体から繰り出す規格外の蹴りで対戦相手をマットに沈める恐るべき強豪だが、本トーナメントにおいては準決勝で王者タツローと拳を交え、大会ベストバウトと呼ばれる熱戦の末惜しくも決勝進出を前に敗れた。大男の割には性格は陰湿で執念深く、大会で恥をかかされたチャンピオンタツローに執拗な敵意を抱き、のちに二度挑戦するもいずれも退けられた。その巨体から「蹴撃の巨人」または「長人」などという渾名がつけられた。

サングレ・ドルコイズ

(188cm31歳)

天乱拳の使い手で、本トーナメントではカーバルダ伯爵の客分であるタツロー・コガを仕留める刺客として呼び寄せられた。普段は別にこのような格闘技興行に出場して生計を立てている訳ではないらしく、実力はあるが余り客に受けるような試合はしない上にトーナメント終了後はさっさとイグベノンを後にした。

マーティ・コルネット

(身長176cm26歳)

彼は過去(と言ってもここ数年の放浪生活の事だが)タツローと何度も激闘を繰り広げた、いわば宿敵の間柄。タツローに先立つこと半年ほど前に別口のメジャー大会を制し、その契約期間が切れたのを幸いイグベノンに乗り込んできた。二人の戦績は全くの五分、実力的にも互角の腕前を持つ猛者である。オタク気質のタツローに比べれば多少さばけた性格だが、かれも基本的には余り人付き合いの

達者な男ではないようだ。身に付けた武術は滅砲拳という、外家系に属する拳法。

エルジエ・メルドーナ

(身長162cm21歳)

過去にタツローと同棲したこともある、流しの踊り子。褐色の肌に金髪が情熱的な女で、都合4回の同棲を繰り返したタツローにとって最も未練の深い相手。イグベノンに姿を現して、何やら修羅場の予感……

ジエネッタ・ルイーザ・ド・フィネーラ

(身長159cm17歳)

ライマード貴族の娘で、クレウスの女房の姉が他家に嫁して生んだ娘。クレウスの事を「叔父様」と呼ぶが、正確には血のつながりは無い。自由奔放な性格でトラブルメーカーのクレウスとつるんで騒動を起こすこちらも迷惑な娘。その普段のお気に入りはヘソ出しのショートパンツという大胆なファッション。タツローに興味を抱いたジエネッタに、よせばいいのにクレウスは益々彼女をけし掛けたりもした。血の繋がりはないが、驚くほど似た者同士の叔父姪である。

先生

(身長178cm推定四〇代半ば)

アスマツドの部下の一人で、仲間内からは「先生」と呼ばれる謎の人物。サングレ・ドルコイズも彼の同門で、その縁から呼ばれたのだ。リベルナとタツロー達の出会いのきっかけを作った人物で、バーストスピリット大会では審判長を務める。普段は格闘技や武術に興味の無いアスマツドのアドバイザーや、タツローが対戦する予定の相手を観察する先乗りスコアラーのような仕事もこなし、敵に回せばおっかないが味方になれば頼りになる人物。

リベンジ——復讐の長人【1】

「うわあ——」

既に一足先に入場し、リング上でその異様に長い体を仁王立ちさせながらタツローを待ち受ける対戦相手、スーリー・ブルタムスのバツクドラフトにも似た気迫に、流石に気の強いリベルナでさえ腰が引けるような気分だった。

それにしても長い男である。手足も長いし胴体も長い、首も長ければ顔も長かった。シルエツトだけ見れば細くはあるが、腕も脚も、腰周りもタツローよりはやや太い。そして、長さはそれを遙かに上回る。ヌラヌラとうねるように痩せこけた巨体は、途方も無く大きな鰻が立ち上がったようにも見えるほどだ。

この“長人”スーリー・ブルタムス、今年度バーストスピリット大会三位の実力者であり、タツローと準決勝で顔を合わせた強敵だった。彼は極宝真拳の使い手、つまりはリベルナと同門と言う事になるが、彼女は顔を合わせたことは無い。この極宝真拳、かなり大きな流派で各地に道場も多く、互いに顔も知らない門弟は少なくない。「なんだい、あのウドの大木は——」

本日は第一試合に出場して無事勤めを果たしたジョーが忌々しげに言った。後になるほど格が上がっていくと言う訳ではないから、第一試合とは言え前座試合とは言えない。確かに、メインイベントやセミファイナルに比べれば顕かに格落ちするが、興行の先陣を切るオープニングマッチは大事なプログラムなのだ。

「チツクシヨ、何でトーナメントでアニキにコテンパンにのされたあの野郎が、またアニキとやんだよ」

成る程、まだトーナメント終了から日も浅く、一度手合わせした選手同士が再び試合を行うのは余り自然ではないかも知れない。普通

の慣例から言えば、トーナメントではタツローと闘う事の無かった選手が挑戦するのが当然と言えは当然であろう。この再戦は、ブルタムスの強硬な申し入れによって決定したのである。

この試合の決定に最後まで反対していたのが、バーストスピリット大会四位の“肉体の虎”ニツク・タイガーであった。普段ならばトーナメントで顔を合わせる事の無かった者同士が試合を組まれる筈である。別にそう言う決まりは無いのだが、それが或いは当然と言うべき自然な流れでは有った。所が今回は、最初から決まっていたとは言え、チャンピオンのトーナメント後最初の試合で他所の準優勝との対戦が生まれ、その上に一度顔を合わせた選手が再び戦うのである。ニツクにしてみれば納得行かない話だが、結局トーナメント上位の選手の意見が通り、ブルタムスの強引な申し入れでそれもやむ無しと言う事になったのだ。返す返すもニツクにしてみれば納得の行かない話だった。何せ、互いに準決勝で敗退した者同士、三位決定戦でブルタムスに敗れたとは言うものの、彼にしてみれば納得の行かない判定だった。その、筋肉の塊のような分厚い体躯にブルタムスの猛攻を受け、鼻も潰れて顔は血塗れ、全身痣だらけの壮絶な有様とは言え、タフなニツクの闘志は益々旺盛で、これから反撃と言つつもりであった。しかし、ブルタムスに一回戦で大怪我をさせられた選手がこの千秋楽の直前に死亡したと言う情報が入り、キリの良い所でレフェリーが試合を止めさせたのである。これだけでも収まらないニツクだったが、それに加えて更に今回のこの横車である。何やら、後々この二人の間に因縁が生まれそうだが、今回のブルタムスの相手はトーナメントで不覚を取ったチャンピオン、憎きタツロー・コガであった。

「ま、相手は三位だ。二回戦で負けたアンタとは発言権も違うんだ
ろ」

「ヒデエな、姉さん」

リベルナの心無い指摘に、ひどく傷付いたジョーが困惑の表情を見せた。

「三位だったって、準決勝は二回戦の次、あの木偶の棒がアニキとやり合ったのはあっしのすぐ後じゃあないスカ。アイツが準決勝にまで残れたのは組み合わせの運が良かっただけでヤスよ。何もアニキと後で当たった奴が強工とは限りませんぜ」

「ハイハイ」

リベルナが、おどけて両手を広げながら舌を出した。言い訳じみてはいるが、確かにジョーの言う事も間違っではない。先のトーナメントでタツローが最も手強いと感じたのはブルタムスでも、決勝戦で拳を交えた“怪腕鬼”サングレ・ドルコイズでもなかった。勿論、ジョーでもない。一回戦で試合を組まれた禽拿術の使い手、ギモス・エレンディなのである。ただ、これはタツローの個人的な感想であり、要するに苦手なタイプだったと言う事である。

「しっかし、なんだよなあ。俺とアニキの決勝戦なら大会ももつと盛り上がったるうによ、マッチメーカーの野郎、何考えてやがるんだ。組み合わせってのはトーナメントの大事なプログラムなんだぞ。ポーっとしてんじゃねえってんだ」

忌々しげにジョーが、自陣営のセコンドを従えたようにぬうつと立つブルタムスを睨み付けたが、相手はそんな視線を気にも止めず、ひたすらタツローの方に底に籠ったように凄みに満ちた目を向けていた。その姿に、ジョーも正直悪寒に近い物が走った。

大男の中には人当たりが良く鷹揚な、所謂気は優しく力持ち的な性格の者も多いが、その反面慎重で勘定高く神経質で執念深い者も案外少なくない。どうもこのブルタムスは後者の典型のようであった。

彼は、自分の事を不遇の実力者だと思っているようであった。否、事実その通りでは有るのだが、別に彼だけが取り立ててその実力に見合う扱いを受けていない訳ではない。しかし、彼は何とかこの不遇を抜け出したいと野心に燃えており、今回のメジャートーナメント出場は絶好の機会だったのである。その機会をタツローに潰された。三位ならばまずまずの成績だし気にする事も無いのだが、どう

もそう言う訳には行かないらしい。

この大男は、人とは顕かに見てくれの違う異様な体格に相当のコンプレックスを抱いており、その裏返しとして殆ど病的なほどに自意識が強かった。尤も、彼の劣等感の根柢は体格だけではなく、言つては悪いがその顔にも有った。その平たく長いまな板のような土台に目だけが小さく、他の部品は大振りな顔立ちは確かにお世辞にも美男とは言い難く、どちらかと言えばかなり怖い顔である。こんな顔の巨漢となれば、気の毒ながら矢張り他人は怖がるに違いない。怪物のような、と言つても現実には本人が気にするほど醜魁でも無いのだが要するに神経過敏な性格で、他人とはかなり違う自らの容貌に根の深い劣等感を抱いていた。恐らく、このような性格の人物は平均並みの体格、普通の顔に生まれたとしても容姿以外に何か理由を見つけてコンプレックスを掻き立てたであらうと思われる。

他人から見れば怪物のような自分が人から尊敬されるには強さしかない。そう思つてひたすら拳法を修行し、一角ならぬ實力を身につけたブルタムスだったが、その強さは直接他人の敬慕に結びつかないこと知り、今度はその力に見合う名声を欲するようになった。しかし、世の中思うようには行かず、苦勞の末漸くこの度のチャンスを、メジャートーナメント出場の切符を手にしたにも拘わらず、その好機をタツローに阻まれたのだから、自意識過剰で執念深いブルタムスにしてみれば許し難い屈辱だったのだろう。何としても苦汁を舐めさせられたタツローにリベンジを果たし、己の實力を業界全体に知らしめねばならない。

今回の再戦申し入れが受諾された理由の一つとして、彼等二人の試合がトーナメント中最高のベストバウトとして評判が高かったからでも有ろう。興行収益の充分見込める試合としてプロモーター側も許可したに違いない。それに加えてブルタムスの執念とも言つべき執拗な闘争心でリベンジマッチはいやが上にも盛り上がり、今回もスタジアムは満席、試合の組み合わせが発表され、前売り券が発売と同時に完売となったのである。アスマッドとしては笑いが止まら

ないであろう。

しかも、例の八百長破りの一件が——やや、否、かなり脚色されて——派手に喧伝されるや試合の賭け金も膨れ上がり、プロモーターにとつて今やタツローは大事な金の成る木であった。この先、どの位続くか知れないが、確かに現在タツローの株は上昇中、今が儲け時と言ふ事らしい。この前のトーナメント公式戦の際には見るからに強そうなブルタムスに賭けの人氣も集まったが、今回はタツローのほうが上、しかし、それ程大きな差も付いていなかった。

遺恨試合の前評判は最高潮に盛り上がり、客席は狂気に似た期待感を抑えかねているようにも見え、それに煽られてタツローもブルタムスも正常ではいられないらしい。最早選手個人を追い越してそれを見守る観客の野蛮で無責任な盛り上がりが何かを生み出し、この一戦に異常な展開を齎しそうにすら思われた。

そして本日のプログラムが滞り無く消化され、今年度バーストスピリットトーナメント女子部優勝“銀狐のエリス”エリス・ブレスティアの登場したセミファイナルも済んで、いよいよメインイベントの開始が告げられようとしていた。

リベンジ——復讐の長人【2】

「今年度バーストスピリットトーナメントチャンピオン“闘匠”タツロー・コガ。此方、トーナメント三位入賞“長人”スーリー・ブルタムス——」

広い会場一杯に地声でコールせねばならない為、観客全員に判るように大袈裟なアクションで選手を紹介するリングアナの口上も甚だ簡素で、肩書きとリングネームだけを呼び上げるだけで精一杯なのだ。しかし、相手の“チャンピオン”に引き比べて自分の“三位”と言う肩書きに甚く誇りを傷付けられたらしいブルタムスは、益々恨みの籠った目付きでタツローを睨みつけている。その全身から放射される感情の闘気は重圧感さえ覚えるほどだ。その気迫にリベルナは正直及び腰で、重心が上ずったような思いである。

「おい、タツロー——」
流石に心配になってタツローに何か一言かけようとした。タツローの事を心配して、と言うのは自分に対する咄嗟の言い訳で、実はブルタムスの気合いに気後れした彼女は、何か喋ってそれを紛らわせようとしていたのだ。

だが——
「——」
リベルナが声を失ったのも無理は無い。

黙ってブルタムスから、如何にもさり気無く視線を外すタツローのポーカーフェイスは嬉しそう、とまで言うべきかどうか、兎も角、強烈な怨念の感情を全身にまともに受けながら全く動ずる事無く、見るからに充実した、正に自分の居場所に帰ってきたような満足感を漂わせて、そこに佇んでいる。まるで、相手の憎悪の波動を心地好く受け、思う存分満喫しているようにさえ見えた。
それはまさしく“極道”の顔である。

異常なリラックスに心身を任せつつ、タツローが試合に備えて軽く体を動かしている。

ジヨもハゴンも余りタツローに話し掛けず、どことなく引いたような物腰で、そそくさと言う感じでセコンドとしての務めだけを果たしてさっさとリングを降りた。

「あのアホが——」

ハゴンが呆れたように言った。

「こう言う時だけホンマに嬉しそうにしくさって」

「なんつうか、こう——」

ジヨも一言言わずに居れない気分らしい。

「畏れ多い感じツスねえ、アニキ」

「だけど、何だか恐いわ、タツローさん」

オルフィアもどことなく用心深い表情でタツローを見上げていた。

リベルナだけが何も言わずにジツとタツローに複雑な眼差しを向けていた。

ブルタムスから視線を逸らし続けたタツローが、静かに相手と目を合わせた。一瞬も目を反らさずこちらに、鉄の棒でも突っ込んでくるような硬質な眼光を放つブルタムスの小さな双眸に、思わずタツローは背筋に震えが走ったようである。そしてそのまま、まるで心が吸い込まれ、魅入られたようにその陰惨な眼差しから目を離せなくなってしまう。相手が放射する、怒涛のような怨念の波動に身を任せるタツローの五体から、まるでエネルギーを注入されたかのような充足感が届いてくる。

そんなタツローの姿に客席は爆発寸前のエネルギーを蓄えたように盛り上がり、リベルナは益々言葉にならない不安を深めているようであった。

レフェリーのボディチェックの最中も両者は深い気合いの底に沈み込んだように静かに、重々しい眼光をやり取りしていた。

客席とリング上の両選手の熱気が場内の圧力を限界にまで高め、タツローとブルタムスがその真っ只中で対峙していた。

ゴングの乾いた金属音を合図に、場内が猛々しくどよめいた。

一瞬そこに目に見えない壁が生じたように、タツローとブルタムスが動きを止めて距離を取った。観客が、力一杯歓声を抑え、地熱のようなどよめきがスタジアムに溜まっているように思えた。

この試合はデッドヒット形式のルールで執り行われる。

デッドヒット——それは、素手でさえあれば肉体のどの部分に、どのような攻撃を加えても構わないと言う過酷な試合であった。バーストスピリット大会公式トーナメントでさえ、決勝戦以外は行われる事は無かった、滅多に採用される事の無い大変危険なルールだが、今回はブルタムスの提案によって実現したのである。タツローの方にも異存は無い。両者の承認の元、この危険な試合形式が実現し、遺恨試合はいやが上にも盛り上がり、本日の異常な興奮を誘う結果となったのである。図式的に喩えて言えば小さな人間でも金的を蹴り上げれば簡単に大男を倒せる訳だから、巨漢のブルタムスにとっては寧ろ体格差を充分に生かせる、幾分規制の有るルールの方が有利な筈だが敢えて不利な条件に身を置いた上で、見事敗戦のリベンジを果たそうと言う態度に彼の徹底的な執念が見て取れる。

タツローが仕掛けた。

ブルタムスの足元に頭から飛び込んで、ダイブするようにマットに転がった。ブルタムスが足を上げてそれを避けると、タツローはポリングの球のようにそのまま転がり続け、距離を取って立ち上がった。安定の悪そうな痩せ型の巨漢の泣き所とも言うべき、文字通り足元を掬う効果的な動きだった。トーナメント準決勝の初対決でも見せた動きで、前にやられているからそれ程慌てはしなかったが、矢張り嫌がつているらしい気配は隠せない。

長身を立て直し、向きを変えて右足で放ったブルタムスのローキックを跳び上がって避けると、今度は左で仕掛けたハイキック——いや、ハイとミドルの中間位、しかし、ブルタムスにとってはミドル

とローの間のような高さの蹴りを、タツローが呼吸を合わせて横っ飛びに側転しながら避けた。巨体から繰り出す蹴りは、先端こそ物凄い加速度は着くもののモーションが大きく避けやすい。とは言え、タツローが蹴りを避けるのにこのようなダイナミックなアクションを見せたのは無意味なファンサービスではない。なんとと言っても相手は見上げるような巨漢、その脚の長さも半端ではない。安易に避けてもそのまま薙ぎ払われる恐れも有り、次の攻撃を防ぐ意味も兼ねて大きく動いて立つ位置を変えたのだ。

しかし、ブルタムスは攻撃を続けた。

大きく踏み込んで蹴りの間合いにタツローを捉えると右足を上げて降ろしてきた。踵落としと言う不合理な技も、これだけ身長差が有ると実に有効である。だが、予めこれを読んでいたタツローは踵を避けて前に出ると、脛脛の部分に肩を、振り下ろされて加速が付く前に自分から飛び上がり気味に背伸びをするように差し入れて、相手の脚を担ぎ上げるように捕らえた。そのまま肩でブルタムスの脚を担いで押し込み、巨大な瘦身を豪快に転倒させた。のっけからの荒っぽい展開に観客は大興奮で歓声を上げ、手が付けられない位ヒートアップしてきたようである。

尻餅を付くように倒れたブルタムスに、タツローが間を置かず仕掛けた。座り込んでいても余り高さの変わらないブルタムスの胸板めがけて両手をクロスさせて飛び込み、果敢な攻撃を仕掛けた。ブルタムスが吹っ飛ばすように更に倒れ、タツローも相手を飛び越えて向うに転がった。

客席のヴォルテージは高まり、地響きのような足踏みがスタジアムを容赦無く揺るがしていった。

この前の初対決の時と違い、タツローが先手先手を取って攻勢を掛けている。前の試合ではひたすら距離を取ってブルタムスの蹴りをやり過ごし、時々遠間から上下に飛び蹴りを見舞って行っただけで最後のとどめまでは終始後手に回っていたタツローが、この試合では積極的に仕掛けているのは、前の手合わせで相手の間合いを掴ん

だからである。この途方も無い長身から繰り出すリーチの有る拳脚の間合いが、どれほどの物なのか初顔合わせでは流石のタツローも計り難かったが、一度闘えば相手の“間”を体で掴む事が出来る。単なる距離だけの意味ではなく、動きの癖とか呼吸とかリズムと言う意味の“間”である。

ブルタムスの得意技は、言うまでも無くこの長い脚を振り回しての荒っぽい蹴り技である。その、痩せ型の体型から見ても体ごとぶつかって行けば弾き返されると言う事もそうそう有るまいと思えるのだ。この前のアデローグのような厚みの有る相手に正面突破の肉弾殺法を仕掛ければ、受け止められて弾き返され、無防備で相手の前に身を曝す事にもなりかねない。そう思って頭から突っ込んで行くのは避けていたのだが、背高ノツポで安定に欠けるブルタムスにならそんな事は無い。逆に、下手に距離を取って相手の出方を待っていたのでは危険である。かと言って、安易に懐にも入れない。長身のブルタムスはその対策もキチンと練っており、下手に近付くと強烈な膝蹴りを喰らってしまう恐れも有った。特にこの身長差だ、ブルタムスの膝は簡単にタツローの顎を捕らえるだろう。初対決時には最後の弓歩捶までは一度も懐に入らなかったタツローである。それまでのトーナメント公式戦でブルタムスはその恐怖の膝蹴りを披露していた為、タツローは警戒してそれを避けたのだ。遠間であれ近間であれ、止まっているのは危険、常に動いて飛び道具で突っ掛け、向うのペースを掻き乱さねばならないだろう。

余談になるが、もしもこの二人が手にグローブをはめ、パンチやキック以外禁止された、所謂キックボクシングスタイルのルールで試合を行ったら、タツローに1%の勝ち目も無いであろう。打撃技と言うものは、身長差が殆ど決定的要因である。ウェイト制で階級を区切った場合は別として、無差別の場合、ほとんど絶望的な条件になる。まだ後世の様に不自由なルールが設定されておらず、ほとんど野放し状態で自由な攻撃が許されている時代、スポーツ化した試合ではない戦いなればこそ、小兵のタツローが無差別級の戦いでも

生き残っていけるのである。そう言った試合形式が主流になったら、タツローなどはお呼びでなくなるであろう。稼げるうちに稼いでおくに限るのである。

タツローにやや遅れてブルタムスが立ち上がり、そこを狙ってタツローがドロップキックを放った。この簡潔にして力強い空中弾は、飛び蹴りの中では最も素早く、無駄の無いモーションで繰り出せる。この世界では小兵の部類に入るタツローにとって、身長やリーチの差を埋めるために欠かせない必須アイテムと言えた。手足を振り回すだけの、ダンス拳法にうつつを抜かしたのではおいそれとは使い辛いだろうが、基本となるブリッジを始めとして胴体自体を柔軟に練った者ならば実に簡単に、素早く繰り出せる技——技というほどの物でもない動きだが、逆に蹴り自体は足を投げ出す雑な当たりである為、命中してもそれ程効果は無い。行儀良く姿勢を正した単飛腿——飛び足刀蹴りのように接触部を安定させないし、旋風脚のように加速度もつかないから相手にダメージは与えられないのだが、最も簡単に距離を詰める事の出来る便利な動作でもある。初対決の時には出さなかった技である。別に深い仔細有つての事ではなく、単にその機会が無かつたのと、リングがどのくらい安全かが分からなかつたのである。

流石にドロップキックは真正面過ぎ、ブルタムスがタツローの飛び蹴りを難無く避けた。

素早く立ち上がったタツローが再びドロップキックを繰り出した。その蹴りが見事にブルタムスの顎を捕らえ、非常に良い感じで突き上げた。タツローからすれば偶然なのだが、これはブルタムスの不注意でもあった。彼は大男に多い、それも攻撃的な巨漢に有りがちな弱点、集中力に欠けるといふ性格的な欠点があった。否、大きな体を支える負担から来る、体質的な欠点と言えるかも知れない。頭は悪く無いし、動きも速くは有るのだが、どうしてもそれを持續するのは難しいらしく、試合中、どこかで意識の空白が生じるのは、或いは宿命とも言うべき弱点なのである。

それ位でブルタムスは倒れなかったが、その直後、試合は急展開で奇妙な事態に突入して行ったのである。

急角度で顎を突き上げられたブルタムスは不覚にもその衝撃で脳震盪を起こした。突如足取りの乱れたブルタムスが、怪しい身振りで泳ぐようにふら付き、そのまま前のめりに、崩れ落ちるように膝を付いたのであった。

その、不自然な挙動に観客もレフェリーも、そしてタツローも一様に戸惑いの目を向けてブルタムスを見守るように注視している。レフェリーが駆け寄って、膝を付いて虚ろな目を宙に泳がせたブルタムスを心配そうに窺っている。その様子を、タツローが不信の面持ちで見詰めていた。

不自然な流れで中断した試合を観客がざわめきながら、遠巻きに窺うような気配で見守っていた。

「どうなったんだよ、一体」
中途半端な所で動きの止まった試合に、リベルナが不信そうに言った。彼女だけでなく、この試合を見守る全ての者が、否、一方の当事者であるタツローですら不信の思いで事の成り行きを息を潜めるようにして凝視していた。

レフェリーがブルタムスに、何かを問い掛けるように声を掛けているが、どうもそれは届いてはいないようである。へたり込んで口を半分開いたブルタムスは心ここに有らず、意識がどこかにトリップしているようであった。

それを見詰めるタツローの胸中は、言葉にならない曖昧な衝動に満たされていた。今の一撃は勢い込んで放った飛び蹴りが偶然入っただけの、完全な事故であった。つまり、これで試合を決めようなどという事は夢にも思わなかったにも拘わらず、意に反して、否、反するも何も、全く何の意図もないのに弾みで起こってしまったハプニングに過ぎないのである。こんな結末で試合が終了しては観客も賭け屋も当のブルタムスも納得しまいし、誰よりもタツロー自身が一番納得行かないのである。

警え試合開始早々、速攻で勝負を決めるにせよ、それが自分の意思による結果ならば良いが只の偶発的な事故で、不意に試合を終わらせたのでは余りに理不尽で、納得が行かないタツローであった。何かを期待して、それは相手が意識を取り戻して試合が再開される事だったが、本人はハツキリとそれを自覚できないタツローは、ひたすら不明瞭な期待感を抱いてブルタムスを凝視していた。

あの様子から見てみるに、顎が砕けたとか、舌を嚙んだとか、首がおかしくなったとか言う感じでは無さそうだった。仰向けに倒れた

訳でもないから後頭部も打っていないし、どうやら弾みを食らって一時的に意識が朦朧としているだけらしい。このまま意識を取り戻せば滞りなく試合を再開できる筈だった。

タツローは、祈るような気持ちでブルタムスを凝視していた。それは静まり返って事態の推移を見守っている観客も同じであろう。

それにしてもレフェリーの対応が拙い。膝を付いて中途半端に座り込んだブルタムスに、一応声をかけてはいるのだが、そのやり方が何か恐々と言うか如何にも及び腰で、出来るだけ相手に触らないようにしている様であった。無理も無い、金の賭ったギャンブルにおいては下手に試合に手を入れるような事は極力控えねば成らないのだ。このまま放っておけばタツローの勝ちになるのにレフェリーが手を出して結果が変わってしまうような事になれば、賭けに負けた客や胴元が許すまい。レフェリーが首になったり、下手をすれば殺されると言うような事態すら考えられる。田舎でも勿論あらゆる試合に金は賭かっているのだが、大会場では額も大きいから勝負に対する厳しさも半端ではないのだ。こう言う点では、寧ろ大会場のレフェリーより、場末の会場や地方のドサ回りの試合のレフェリーの方が対応がしっかりしている。こう言う試合の流れを切ってしまうような突発的な事態は場所を選ばず時々起こる訳なのだが、田舎の小さな会場の試合でレフェリーが倒れた選手の頬を張り倒して活を入れる場面を度々タツローは見てきた。

一応ダウンと言う事だが、レフェリーはカウントを取る事もせず、ひたすらブルタムスが蘇生するのを待っているように、徒に時間を引き延ばしているばかりだった。タツローは苛々してきた。否、苛付いて、と言うより何か焦燥感に駆られたような気分だった。

そして――

遂に業を煮やしたタツローが、座り込んだまま未だ朦朧としたまま

のブルタムスと、その傍らでオロオロしているレフェリーに歩み寄って行った。その行動に、観客が腑に落ちないような思いを全員で共有しつつ、不安に駆られたような中途半端などよめきを起こした。レフェリーを押し退けるようにしてブルタムスの目の前に立ったタツローは、左右の掌で往復ビンタを食らわした。客席は静かに、気配だけが騒然とした気分を、あつと飲み込んだ。

何かを言おうとしたレフェリーを無視すると、再びタツローはコーナーに下がって待機した。ややあつて意識を取り戻したらしいブルタムスが、頭を抑えながら首を振った。

その光景に、観客が感激したようにおお、と大きくどよめいて、次には割れんばかりの拍手が巻き起こった。その観客の反応に救われたようにレフェリーが、漸く自分の為すべき事を発見したかのような間の抜けたタイミングで、観衆に何事かをアピールするように両手を頭上で何度も交差させた。まるで自らの不手際を誤魔化すようにも見えるジエスチャーだった。

リベンジ——復讐の長人 【5】

意識は戻ったとは言え、まだハッキリとは事態を把握してはいないかのようなブルタムスト、タツローは距離を置いて対峙した。

そんなタツローを見詰めながら、リベルナは中途半端な、周りに何か反応を期待するような調子で意見を述べた。

「一体、何考えてんだらうねえ、あの昼アンドンは——」
リベルナには只今のタツローの行動が、今一つ腑に落ちないらしい。タツローは特別に勝敗に拘泥する訳でもないが、かと言って正々堂々などというスポーツマンシップとは無縁な男である。そのタツローが、何故斯様な行動を取るのか、彼女には判らなかつた。

「あつしにやあ、判りヤスぜ、アニキの御胸中が」
ジヨーが、しみじみとリベルナに答えた。

「そうよねえ」
後を引き取ったオルフィアの口調も、いやに納得したような余裕が感じられる。この二人は仕事師である。体を張って客を満足させ、その見返りにギランティを受け取って生活の糧とする、言ってみれば“プロ”である。アマチュアの中途半端な勝負観などとは無縁の世界に生きるジヨーとオルフィアには、今のタツローの行動が理屈でなく理解できるのだから。
リベルナが、そんな二人に何かしら未練げな、期待したのと違う、といった顔を向けた。

「これが仕事やからな、あのアホンダラの」
そんなリベルナを諭すように、ハゴンが一言で簡潔に締め括った。理屈は兎も角、氣分的には腑に落ちないリベルナだったが、皆が納得しているのに自分だけがそれを判らず、拘っているのがみっとも

ないような気がしてそのまま口をつぐんだ。

年上で性別も違うジョーやハゴンは兎も角、同じ女でしかも同い年のオルフィアでさえ判っている事を自分が納得できない事が、リベルナには釈然としない。

この試合は——否、試合というのはタツローにとって全て“仕事”であった。勝てば良いと言うものではない。中には是が非でも勝たねばならない、勝つ事が仕事という試合も有るだろう。しかし、この試合は違う。この前の、アデローグとの試合は勝つ事が全てであり、先程のような展開となったらそのまま放っておいて勝つ事を優先させるだろう。しかし、この試合は違う。勝てば良いと言う試合ではない。仕事の完成度を何よりも優先する、タツローも矢張りプロの仕事師なのであった。

未だ完全に復調してはいないらしいブルタムスに、タツローが突っ掛けた。真正面から後旋飛腿、即ち飛び後ろ廻し蹴りを、やや大雑把に仕掛けた。顔を両手で庇いながら避けたブルタムスに、漸く気合いが入ってきたようである。

“成る程、そう言う事かい——”
何がそう言う事なのか、それこそ理屈では判っているものの、正直体のどこかに違和感を残したままのリベルナだったが、今の光景で何事かを無理矢理自分に言い聞かせたようだった。それはタツローやジョー達の立場ではなく、正直な所観客の側からの理解ではあったが。

ブルタムスが、自分自身に気合いを入れようとするかのように左脚で豪快な廻し蹴りを仕掛けた。こちらも余り集中力の無い、強引な技だったがそうする事によって、一旦外れた歯車が少しづつ噛み合っ

て来ているようであった。
長い脚を振り回しての乱暴なキック攻撃が連続してタツローを襲う。

ブルタムスの蹴り技、リベルナと同じ極宝真拳のだが、両者の技は微妙に違う。簡単に言ってしまうえば振りの大きさに違いがある。女性としてはやや背が高い方とは言え、矢張り男から見れば小柄なリベルナなどは脚を思い切り伸ばして弧を大きく蹴る。それに比べれば、途方も無い長身のブルタムスは寧ろ自分のリーチの長さを持余さぬよう気をつけねばならず、出来るだけ蹴りの軌道は小さく、コンパクトに纏めねばならない。具体的には、膝の力を抜き切つて軽く振り切るのだ。決して振り回すのでも、蹴るのでもない。小さく脛を振る。その為に、膝の使い方に独特の工夫があった。外側から大回りに脚を振り回すのではなく膝を入れるようにしてリードし、蹴りを先導するのだ。このやり方だと威力は落ちるが、図体の大きなブルタムスならば問題は無い。本来の極宝真拳の蹴りならば大型を相手にする時にも有効だし、大抵の相手は自分より小型だから、両方合わせて使い分ければ動きを止めた後で最後のとどめに使えるのだ。所謂、ムエタイ流の“テ”と呼ばれる蹴り技とほぼ同質である。ムエタイの蹴りは強烈な破壊力があるといわれるが、それは膝のみならず、更に腰を深く入れるからだが、そうすると膝の靭帯に掛かる負担は相当なものになる。要するに打撃の際の力点が殆ど膝に掛かる仕組みで、これで強力な負荷に耐え得るためには幼少時から余程サンドバッグやキックミットを蹴り続けて鍛えねばならず、数多くの脱落者の中のほんの一握りの生き残りだけが修得できると言う過酷な技能なのである。

ブルタムスの暴風のような連続蹴りをタツローが軽業師のようにかわし続ける。

しかし、流石に避けきれず右のハイキックを喰らったが、頭部を硬くガードしたタツローは、反対側に自分から飛び込むように回転して威力を減殺し、すぐに立ち上がった。

余談だが、タツローは所謂ハイキック、上段廻し蹴りが得意ではない。足自体は高く上がるが、それを振り回す不合理をタツローは好

まないのだ。タツローが軸足を残した脚撃で上段を狙う場合は、殆ど端脚か活面脚である。この二つの蹴りには技術的な共通点がある。足首を返して擦り蹴ると言う事である。端脚は、横蹴りなどではなく、足刀を用いた前蹴りと言った趣の足技で、命中する時にも脚側部を粗雑にぶつけるような低レベルな事はせず、小指の付け根辺りから足刀全体を切り込ませるように接触させ、踵の横でインパクトする、大変技巧的な技なのだ。活面脚も、足の内側、土踏まずの部分で側頭部を擦り蹴り脳震盪を起こさせるのだが、下手糞は踵を雑にぶつけるだけの蹴りとなる。どちらも足首を柔軟に、鋭く用いねば威力は出ない。当然軸足は踵を浮かさず固定している。これも、足首が粘り強くなければ死に技になってしまっただろう。これらの蹴り技は、体を倒さずに用いる事が出来ると言う利点がある。上段廻し蹴りはどうしても体を倒さねば成らないが、片足立ちで、体を横倒しにするなどと言う不安定な姿勢は実戦と言う視点から見れば、無謀を通り越して宛ら自殺行為に等しいと言える。タツローにとっては、飛び蹴り以上に危険な、不合理な技であった。しかも、その上、蹴り脚を振り回すのだからどれほど姿勢が崩れるか、無理に無理を重ねた狂気の沙汰に近い。いつその事、地に倒れて転がった方が余程安全である。相手にも寄るだろうが。更に言えば、足首を柔軟に鍛錬したのは元々太輪拳の基本でもあるのだが、タツローは特にその強化に努めたのだ。この足首の功德で、タツローの歩法は自然で安定している。基本的に腰と背骨のバネで動く為、ボクシングのように踵は浮かさず足の裏は地面にぴたりと着け、足首はシヨックアブソーバーの役割を果たすのだ。

足元を狙って来たブルタムスのローキックを、タツローが跳躍して避けた。否、避けただけではなく、そのままブルタムスに突っ込み、鼻面めがけて頭突きを狙った。あっ、と意表を衝かれたブルタムスが、顔を振って避けたが、タツローは止まらず側頭部に、と言うより頬骨に頭突きが当たった。まともに命中したと言うより掠ったよ

うな感じである。落下して転がったタツローが再び立ち上がり、チヤンスを窺ったが、顔を軽く振ったブルタムスはすぐに相手の反撃に備え、ファイティングポーズを取って威嚇した。流石に足元はブルタムスも警戒しており、そう簡単に攻められそうには無かった。

リベンジ——復讐の長人 【試合終了】

ブルタムスが、またしても蹴りの強襲でタツローを追い込みにかか
る。しかし、些か雑な攻めと言えよう。ブルタムスも焦っているの
だろうか。再び続け様に襲い掛かる蹴りを避けるうちに、今一度ブ
ルタムスの集中力が途切れた。そのチャンスを、タツローは今度こ
そ見逃さなかった。ブルタムスの左側に一步踏み出すと、跳躍して
後頭部を狙って右脚が一閃した。ふ、と気付いたように慌ててブル
タムスが向きを変えようとしたが手遅れである。その時にはタツロ
ーの足がキャンバスから離れ、体が宙に浮いていた。寧ろカウンター
のように自分から当たりに行く形になった。

延髄斬りが見事にブルタムスに一閃した。

元々上段廻し蹴りが得意ではないタツローだが、頭部を足の甲で狙
う際には片足立ちのハイキックではなく、ジャンピング・ラウンド
ハウス・キックの方が得意なのだ。これは本人の癖であって、何も
同じ位の体格のハイキックの達人と比べてタツローの延髄斬りの方
が早いなどと言う事は無いだろうが、それでも並みの、否、並み以
上と言うレベルの上段廻し蹴りなど比べ物にならないほどの鋭い一
撃だった。脚撃も軸足を残しているとそれ程極端に速くは無いが、
体を投げ出す空中殺法では自分自身が常に動いているので、蹴り脚
は思い切って振り抜かねば外れる危険が有った。それにバランスを
取る手間が省けるので思い切りも着く。第一、頭一つ半ほど背の高
いブルタムスの頭部に廻し蹴りなど、どう頑張っても届く訳も無か
ったし、タツローのみならずこれだけ身長差の有る相手にハイキッ
クを見舞うのはどんな名人でも無理だろう。

流石にこれだけでKOと言う訳には行かず、ブルタムスは再び目線
を泳がせてそこに辛うじて立っている。しかし、幾分視線が虚ろに

はなっているもののブルタムスは気力でこちらの方を窺っている。初対決の時のように懐に飛び込んで弓步捶とは行きそうに無い。下手に正面に立つたら膝蹴りの餌食になりそうだった。だが、今こそ勝負時とタツローは読んだ。

“行くど！”

マットに身を投げ出したまま立ち上がり半分しゃがんだ姿勢から、タツローは伸び上がるように跳躍した。

おお、と観客がどよめいた。

棒立ちのブルタムスに体ごとぶつかって行き、ジャンピング・ボデイ・アタックが見事に決まった。

「やったあ！」

リベルナが叫んだ。

「ええど、タツつあん」

ハゴンも声を上げた。

只でさえ延髄斬りのダメージでふら付いている所に持つてきて、ソップ型のブルタムスでは到底この攻撃を受け切れない。空中から覆い被さるようなタツローの浴びせ倒しに、安定の悪い巨体が為す術も無く後方に倒された。辛うじて後頭部だけは打たないように無意識に顎を引いたが、倒れた際に内臓を押し潰され、ブルタムスは息が止まった。何本かの肋骨にひびが入ったかも知れない。元々打撃の使い手で、受身などは余り練習していないし、タツローのように胴体を鍛えた訳ではない。集中的な、点の打撃には強いが、全体的で総重量の大きなこう言う衝撃に対しては脆いのだ。

殆ど勝負は着いたも同然だったが、タツローは更に最後の二撃を加えた。

ブルタムスの両肩を両手で抑えるように天に向かって足を上げると、

逆立ちに似た姿勢から右膝を打ち下ろした。先のトーナメントの決勝戦でサングレ・ドルコイズを仕留めたのと同じフィニッシュ・ホールドであった。あの時は、相手を倒したのはボディ・アタックではなく、フライング・ボディ・シザースだったが。

鳩尾に見事に膝が突き刺さり、ブルタムスが痙攣を起こして気絶した。

観客が総立ちになって興奮し、レベルの高い熱戦を力の限り祝福した。

かくて、タツローは“仕事”を最後までこなしたのであった。

リベンジ——復讐の長人 【試合終了】（後書き）

延髄斬りといえば、猪木とハンセンの試合で当時引退したばかりで解説になれてなかった山本小鉄さんが、手四つの体勢から強引に、隙を衝いてジャブみたいに繰り出した延髄斬りを称して、

「今の技は効いてません」

おいおい、もうちょっと言い方あるやろw

確かに、ハンセンもフラフラしながら倒れずによろけてるだけやったけど、効いてません、はないでw

合掌です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5965h/>

拳法無宿 ~ D e a d H i t ~

2011年9月9日05時46分発行